

氏名	奥 村 修 三
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	甲 第 2 8 号
学位授与の日付	昭和35年3月31日
学位授与の要件	医学研究科外科系外科学専攻 (学位規則第5条第1項該当)
学位論文題目	癲癇痙攣の興奮伝導機序に関する実験的研究
論文審査委員	教授 陣内伝之助 教授 砂田輝武 教授 奥村二吉

学 位 論 文 内 容 要 旨

癲癇痙攣については、すでに相当の研究があるが、著者は痙攣の外科的治療の可能性を追求するために、その痙攣をひきおこす異常興奮の中樞神経系内における発生ならびに伝導機序について実験的研究をおこなった。使用動物は猫、興奮の標示としては活動電位の記録上にあられる棘波をもちいた。

結 果

- 1) 大脳皮質、尾状核、蒼球、視床、黒質は興奮の発生、伝導に重大な意義を有するがそのうち大脳皮質がもっとも興奮性が高い。
- 2) 癲癇痙攣は興奮が中枢神経系内のどこかに起れば直ちにおこるものではなく、たとえば大脳皮質に興奮が発生した場合にはそれが時間的おくれをもって大脳基底核、中脳核へと伝導されて痙攣がおきる。そして定型的な癲癇痙攣をうるためには大脳基底核以下の興奮を必要とする。

(昭和33年3月31日発行 岡山医学会雑誌第70巻3号723頁に発表)

論文審査の結果の要旨

奥村修三提出の「癲癇痙攣の興奮伝導機序に関する実験的研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は次の通りである。

本研究は癲癇痙攣の興奮伝導機序を知らんとし、皮質、大脳基底核、中脳核等に直接刺入した電極で、カルチアソール静脈注射または局所注射による痙攣の興奮の伝導様式を同時記録を以て誘導してしらべたものであって、従来このような方法を以て詳細にしらべた研究はない。本研究方法は従来切除、刺激実験に比して生理的であり、本研究によって始めて興奮の発生と伝導とを区別すべきことが明らかにされた。すなわち、カルチアソールを静脈注射した場合、痙攣興奮は常に皮質、その中でもとくに運動領に始まるものが多く、ある一定の時間的遅れをもって大脳基底核、中脳核に伝導され、この順序に興奮が終息してゆくが、四肢筋の興奮はすでに大脳基底核の興奮以前に始まり、大脳基底核の興奮とともに間代性痙攣から強直性痙攣に移行し、さらに後間代期に入ることがわかった。すなわち癲癇痙攣はその興奮が他の核に次々と移って行ってはじめて起るもので、定型的な癲癇痙攣には大脳基底以下の興奮を必要とすることがわかったのである。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。